

① 北日本新聞八月三十一日三十面の「セイヨウタングボ」の記事を読んで、  
ぶんぶんジューニアのコーナーを見ていると、「セイヨウタングボ」という字が目にとまりました。わたしは、一年生の時からタンゴボホの研究をしています。それで、お母さんといしょに、記事を読んでみることにしました。立山・黒部アルペンルートでは、高山植物をまもるために、ボランティアの方がたが、外来植物をぬきとる活動をしているそうです。セイヨウタングボも、その一つです。

今から十年前は、一年間に何と、「二万四千本」もセイヨウタングボが引きぬかれていたのに、さい近の五年間は、「三千本」。セイヨウタンゴボの生そく数がへった、と書いてありました。

わたしの研究では、外来しゅのセイヨウタングボは、かるいわたものがとおくまでどんどんいで、そこでたくさんのもめを出すので、とてもふえやすい、ということが分かつていま



す。こゆうしゅのニホンタンポポは、そのはん対なので、たんけんをしてみても、めったに会えません。

わたしは、「本当にへらすことができるのかな」と、ぎ間に思いました。でも、「大ぜいの人の力で、根気強くとりのぞいた」と、せいこうのわけが書いてありました。

わたしは、この活動を、ぜひ平地でもやってみたいのです。大切なことは、みんなに、セイヨウタンポポとニホンタンポポの見分け方

を、知つてもらうことです。そうすれば、大ぜいの人気が、この活動にさんかできます。

よくかんさつすれば、ニホンタンポポが生えている場所が、まだのこつているはずです。もし、セイヨウタンポポもいつしょに生えていたら、まずはそこから、ぬきとる活動をはじめるのがいいと思います。

二ホンタンポポが、ふつ活するといいな。さんほの時、道ばたのあちらこちらで、二ホンタンポポの花を、見つけてみたいです。



# なるほど富山 読んでガッテン

立山・黒部アルペンルート

セイヨウタンポポが減る

立山・黒部アルペンルートで、外来植物の代表的な存在だったセイヨウタンポポの数が減少しています。外来植物が増えると、立山に生えている貴重な高山植物の生息地を奪いかねないと心配されていました。どうやって減らすことができたのか、取材した記者に聞きました。

— 外来植物とは何ですか。

もともとなかったのに、人間の活動によって持ち込まれた植物を指します。アルペンルートの道路沿いにはセイヨウタンポポを含め40~50種以上が生息していると言われます。どのようにして持ち込まれたかははっきりしていませんが、車のタイヤや入山者の靴などに種が付いて広まった可能性があります。繁殖力の強い植物が多く、セイヨウタンポポもかつては室堂にまとまって生えている様子が見られました。

— セイヨウタンポポはどれくらい減ったのですか。

県は1997年から外来植物を抜き取る活動を行ってきました。富山市科学博物館の学芸課長代理、太田道人さんは、この活動の効果を確かめるため、立山・黒部アルペンルートの緑化研究報告にまとめられている活動記録を分析しました。抜き取ったセイヨウタンポポの数は年々増え続け、2004年には

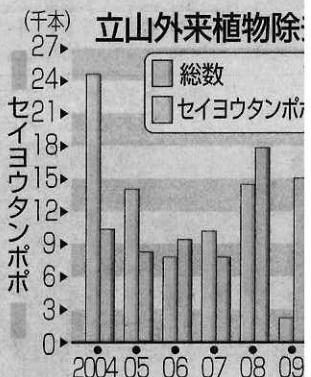


## 地道な除去が効

2万4079本を記録しました。ところが09年からは一気に減り、13年までの5年間は2000~4000本台と、ピーク時の9分の1から5分の1ほどになっていました。抜き取った外来植物の総数はどんどん増えています。太田さんは、総数が増えているのにセイヨウタンポポの数は少ないままなので、除去活動によってセイヨウタンポポが広がるのを抑え込むことに成功していると結論付けました。

— 成功の理由は何ですか。

太田さんは「大勢の人で1本ずつ抜き取っていく地道な人海戦術が広がってきた」と分析しています。県は外来種を取り除くための講習会を開くなどして多くの人が取り組みやすい環



し活動を続ければ、書き返すこともあるよ。は2年前から弥陀ケ原(みだがはら)に除いた一角を観察(かんさつ)し物を抜き続けると一晩(かんばん)始めることが分かる。田さんは「根気強く(こんきづよく)引き続ければ、高山植物(かんぽつぶつ)が生きる」と話していました。



立山・黒部アルペンルート沿線で、外来植物の代表格だったセイヨウタンポポ=写真=が除去活動により減少していることが、富山市科学博物館の太田道人学芸課長代理の調査で確認された。ボランティアによる外来種除去活動の記録を調べたところ、昨年まで5年間に除去し

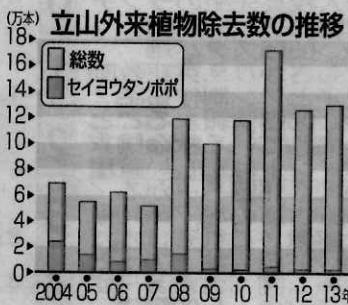


たセイヨウタンポポの本数はピーク時の9分の1から5分の1ほどになっていた。太田課長代理は「地道な人海戦術で繁殖の抑え込みに成功している証拠。貴重な生態系を守るために継続していくことが重要」と話している。

(社会部次長・稻垣重則)

## 立山・黒部アルペンルート沿線

# 外来タンポポ減った



# 地道な除去活動実る

アルペンルート沿線は、車両や入山者に付着して種が広がり、セイヨウタンポポなど40~50種以上の外来種が生息している。繁殖力が強く在来種に悪影響を与える可能性が

あるため、県は1997年に除去を開始。マニュアル作成や重点除去種の指定など対策を強め、近年は作業参加者が年間延べ約500~800人台にまで拡大した。ただ、抜き取っても翌年には残った根から再び生えるため、“いたごっこ”との声があった。

太田課長代理は除去活動の効果を確かめるため、立山・黒部アルペンルートの緑化研究報告にまとめられている97年からの除去活動の記録を分析。抜き取ったセイヨウタン

ポポの数は活動開始から増え続け2004年には2万4079本を記録。ところが09年からは一気に減り、13年まで2千4千本台で推移していた。

太田課長代理は2年前から弥陀ヶ原で外来植物を取り除いた一角の定点観察も実施。外来種を抜き続けると、在来種の一部が再び増え始めることが分かりってきた。太田課長代理は「根気強く除去を続ける。外来種のシロツメクサやイタドリなどはまだ除去活動が追い付いていないので、さうなる取り組みの活性化が

の総数は、活動の活発化を反映し、97年は1万5490本だったのが13年には12万9914本になるなど右肩上がりに増えている。太田課長代理は、総数が増える中、セイヨウタンポポの数が低く抑えられていることからセイヨウタンポポの勢力が弱まっていると結論付けた。

元富山営林署長で、97年からセイヨウタンポポを中心とした外来種除去活動に力を注いできた松久卓さん(75)も、「近年はセイヨウタンポポが目立たなくなつた。協力者が増え、輪が広がってきた成果」と喜ぶ。

道路沿いで行われた外来植物の除去活動は立山・黒部アルペンルートで行われた。過去の記録によると、2004年には立山の除草活動で4079本のセイヨウタンポポが除去された。その後、2009年から減少傾向となり、2013年まで2千4千本台で推移していた。